

2011年 岡山国際サーキットカート第4戦(8/27)レポート

8月27日に開催されたのは、岡山国際シリーズ全6戦のうちの第4戦だ。

スーパー耐久およびF3という、ビッグレースと併催で土曜日決勝。

前回の第3戦から5週間だけ経過して夏の2連戦の2つ目。快晴だった前回のレースとは異なり、秋雨前線が日本を縦断、岡山上空にもまたがっており、金曜から降ったり止んだり、気象的にナーバスな雰囲気の中、開催された。



1ヶ月前の、前回のレースを思い出すと、SK-2クラスの岡崎圭吾の(KIKI YZ125)走りが印象深かった。彼は序盤に順位を下げながらも、和田多博、徳岡秀紀を抜き去り、最後は15歳の新鋭選手である立山 遼太郎ともつれ合いながらフィニッシュして見せた。今回のレースではどうなんだ？という感じで、なかなか興味深い。今年からカートをイントレピットに乗り換え、彼は全盛期のポテンシャルを復活させたように見えるが、今回のレースでそのへんがはっきりしてくると思われる。何しろ、レースをすることを、すごく楽しんでいるように見える。



最近、勢いを感じる速さの、ジョーこと岡崎圭吾と、その後方には、彼を支える鳥川メカニック。

前日の雨が路面に多少残った状態での予選だったが、全体の総合ポールは、最高峰のSK-1 クラス前年チャンプ、藤森正行 (FPGP & KiKi) が獲得で、これは定位置だ。しかし、徳岡宏 (スーパーカート 1 号キキ) が4サイクルのYZ250 ながら、かなりの好タイムで2番手。ポールとの差はわずかコンマ8秒で、これは意外と少ないタイム差。3番手は名古屋からアクアショットの黄色いフルカウルマシン鈴木雅宏 (ASR-C sportiva) で4番手には大槻栄治 (BIG・MOON-Z・KiKi) が続く。そして車イスの名レーサー藤井勇人 (hayato/special) が総合の5番手だ。

興味深く見守っていたのがSK-2クラスのタイムアタック。ポールポジションは意表をついて、徳岡秀紀 (スーパーカート2号キキ) が獲得し、今回が初めて。15歳の新鋭、立山遼太郎 (NTG・HEARTILY・KIKI) はコンマ3秒差の2番手。3番手は関東から遠征のチーム・クニから、牧野政男 (チームクニ・まゝこと)。4番手は和歌山の鉄人こと和田多博 (カワニシパワーYZ125)、注目の岡崎圭吾は予選は少し振るわず、この位置で5番手。そして矢路尚彦 (サムライカート & キキレーシング) が6番手だ。

立山は2番手だったものの、やはり本番では本領を発揮すると考えられ、その4連勝を阻む力を持つと見る最右翼が予選3番手の牧野と5番手の岡崎。くしくもタテに3台並んでのスターティンググリッドである。



今回全員が陣取っていたのは2コーナーとレポルバーの間にあるパドックだった。皆、そこでセッティングをしたあと、がらがらと台車に乗せて、ピットロードまでカートを運んでから走行だったが、なんとその間に急に陽がさして、26度しかない気温が一気に32度に跳ね上がった。

練習と予選の間のわずかの時間にタイヤ交換せねばならず、キャブまで変えるのは難しい。要するに、若干、ベストとは言い難いセッティングでアタックしている車両が多かったという事。とくに2クラスは本当の実力どおりとはいえず、本番はこの順番とはまた違って来るだろう。

3クラスは藤澤 正治 (フジサワテクノス MAX トニー) で、四国は松山からはるばるエントリーの選手がポールポジション獲得。

さあ、時間がきて、決勝スタートだ！



例によって1クラス5台のトップは藤森でトップを引っ張る。
最初の 1-2 コーナー区間で、うまく走った立山が2クラスのトップに浮上した？！
うむむ、少しよく見えない・・・



バックストレートをすぎて、インフィールドに戻ってきて、そこで2クラスのトップを再確認だ。
立山(43番)に続くのは徳岡秀紀で、和田が続く・・・
・・・って、あれ？あれー？？岡崎と牧野はどこいった？いないぜ？

ほどなく全員走りすぎたあとで、牧野、岡崎が通過した。
上記の 1-2 コーナーの写真の時点ですでに 2 人とも写っていないので、1 コーナー進入の減速時に 2 人が接触し、大きく順位を下げてしまっていたらしいことが判明した。

2クラスのトップを逃げるのは目下3連勝中で4連勝を狙う立山。前方の1クラスマシンのスリップも利用し、逃げにかかる。反面、2番手の徳岡秀紀は最初はちょっとペースが上がらない。4番手のベテラン矢路も、がんばって食い下がっている。



3番手の和田(69番)が徳岡へのチャージを開始した。しばらくは、トップ立山を追いかけるどころではない2位の徳岡秀樹(40番)。だが、なんとか2位の座はキープする。



ところで、1クラス勢は、全選手何年も走ってきたベテランであるし、予選の順番がそのポテンシャルと言え、『その順番どおりのフィニッシュになるのかな？何もなければ。』といった、予想であったのだが、トップを走る藤森に変化がおき、急に徳岡宏に追いつかれた。テンション高く追い立てる徳岡宏は2クラス2位を走る徳岡秀紀のお父さん。親子そろってトップを追撃する展開である。



見てるほうは、徳岡(父)が、相当調子が良いに違いない・と感じたのだが、そうではなかったようだ。あとでわかったのだが、トップの藤森のエンジンが不調だったのだ。

立ち上がりで一瞬だけミスファイヤを起こしてしまう現象。これは高度なレーシングエンジンであるRS125には、しばしば起こってしまう様だが、予選まで、まったく問題なかったのに、この本番で、コースのあちこちで、この現象が藤森を襲っていた。それでも、アクセルの踏み方を工夫して、なんとかトップの座をキープする藤森だ。

と、そうこうしているうちに終盤戦。2クラスのトップ争いに目を移すと、



徳岡秀樹はなんとか調子を取り戻して前方の追撃にかかるが、そのときには立山はごらんの様な、結構な差をつけてしまって独走。今回の2クラスは、この、立山-徳岡秀紀-和田の順番でのフィニッシュとなりそう。

立山は、北九州の小倉から、徳岡は大阪から、鉄人和田は和歌山から、と、それぞれ異なる地区からの参戦の3人だ。

SK-2のトップ3台の順番はずっとこのままであった。展開的に単調な感じがし、岡崎と牧野がこの争いに絡んでいたら、面白かったのに・・・彼らが1コーナーで脱落してしまったことが、残念で、また違った戦いになったろうに、と思ってしまうのだった。



エンジンをいたわって走る藤森と、大きな獲物を狩らんと鋭い走りの徳岡宏

さあ、最終コーナーを総合優勝を争う2台のマシンがやってきた。藤森の背後にぴたりとつけた徳岡宏が満を持してスリップから抜け出る。そして並ぶ！うお！ぬ、抜いたアアアア！そのままフィニッシュラインを通過！徳岡宏、大逆転でひさびさの総合優勝達成！

今回も、最後のピット前、みんなの見てる目の前での順位変動で、こんどは1クラスだ！またも「おおーっ」と歓声があがるなど、なかなかの見応えだった。

昨年のその前もこのチャンピオンである藤森は2位になってしまって、少し気の毒な気がしたが、これも勝負であるので仕方ない。秋から冬にかけてRS125エンジンはブン回る。彼の季節で、また、ぶっちぎりのレースをやって、今年もチャンプに輝いてほしい。

2クラスは、やはり、立山が優勝し、徳岡秀紀 和田多博 の順番で表彰台。続いて、コースアウトから復活してきたチーム・クニの牧野が、最後は矢路をかわして4位へ。その矢治が5位で、6位には池信孝治が入った。

SK-3クラスは月本幸常(赤い彗星)が勝利して、今期初優勝！



お立ち台の時間だよ

レース後の表彰式は1クラスと2クラスそれぞれの上位3名で行われた



この写真は1クラス表彰台の光景と各選手のアップ画像。

左から、エンジントラブルで2位は仕方ない 藤森 正行、今季初優勝の 徳岡 宏、そして3位の 鈴木雅宏



2クラス、左より2位の 徳岡秀紀、中央は勝率100%を維持する 立山遼太郎15歳、そして3位は和田多博



3クラスの月本幸常(赤い彗星)の真っ赤なマシンだ！表彰台がなかったから、グリッドの写真



まとめ

今回のレースでは、気温に注目していた。予選開始した朝は25度で、陽が照ったとたんに32度になった。決勝の頃には陽が差して38度、ひざのあたりの温度は40度以上にも上がっていた。そして曇って風が吹けば、さっと30度くらいに気温はさがってしまう。アスファルトがフライパンのようになっていて、急激な温度の上下が見られた。

写真を見てわかるように、スーパーカートは路面付近の空気の層をはぎ取りながら進み、結構低い位置の空気を吸気する。『夏のレースはジェットが勝負を握る』とはよく言われることだが、何がどう難しいのか、10年走行のベテランでもピタリ合わすのが難しいのは、そういった部分なのだろうか？という気がした

残るレースは秋の良い季候に行われる10月30日の第5戦と、冬の到来を感じさせる12月4日の最終戦でチャンピオンが決定する。言うまでもなく日本は、はっきりとした四季を持つ国だが、毎年、イヤというほど、それを実感できる岡山国際シリーズの終盤戦。

そこで立山-岡崎-牧野-徳岡-和田ら、2クラスのアタマをめぐる選手達が、雌雄を決する激しい戦いをやってくれる。立山は来年は走らず、今年限り。なので、やっつけるなら、あと2回しかチャンスがないから、ベテラン勢はムキになるしかない。

だから、ものすごく楽しみなのだ！

〈終〉